

根津神社と第六代将軍

児玉 寛嗣

数ヶ月に一度、検診を受けに日医大病院に行く。予約の日、めったに降らない雪が朝からちらちら、最悪だ。病院は不忍通りから本郷通りに抜ける坂道の中ほどにある。坂道が思いやられると、こわごわ家を出る。通院中、転んで骨折、そのまま入院などは笑えない冗談だ。いつもなら三十分のところを四十分ほどかけてゆっくり歩く。転ぶことなく無事に着く。雪にしては来院者が多い。検診を終えて外に出ると雪もやみ日もさしている。道路を隔てた根津神社に寄ってみることにした。

神社の歴史だが、この場所には甲府藩主の徳川綱重の屋敷があった。そこで第六代将軍、家宣は生まれた。誕生後に父の綱重が正室を迎えたので身分の低い母に生まれさせた子である家宣は家臣の養子となる。しかし、綱重の正室に男子がなかったために呼び戻されて、綱重と名乗り後継の甲府藩主となった。第五代将軍にも男子がなく、後継者探しが行われた。家光の孫という血筋がきいて四十八才の家宣に白羽の矢が立った。しかし、単につきがあっただけの男ではなかった。将軍在職はわずか三年あまりであったが、評判の悪かった生類憐みの令の廃止、財政改革などと政治の立て直しを図っている。

ももとの神社は家宣の生誕地の近く一帯の産土神として団子坂の上にあった。家宣が将軍になると決まった時に生家の敷地を神社に寄進して幕府の金で壮大な社殿を造営し、震災や戦災にもあうことなく国の重要文化財として残っている。家宣が将軍にならなかつたら小さな祠のままだっただろう。この神社も運がいい。

境内には家宣誕生時に胎盤を埋めたとされる「胞衣塚」が残っている。それは石を無造作に積んだだけのものだが、うっすらと覆っている白い雪が印象的だった。

神社の周りは門前町として繁盛しており遊郭もあった。しかし、近くの本郷に東京大学の設置が決まり、遊郭は洲崎（現・江東区）に引越した。そのままなら「学士様の遊郭」として名を残したかもしれない。こちらは運が悪かったのか。